

誰もが働ける社会をつくる

ソーシャルファームを知って、考えて、動きたくなるワークショップ

【第4回】ソーシャルファームのリアル

(雇う人と支える人の目線から)

2024 年 12 月 16 日 (月) 19:00~21:00

ヒカリエ 8F クリエイティブスペース 8/

登壇者：

柿島拓也 株式会社拓実建設 代表取締役

三宅晶子 株式会社ヒューマン・コメディ 代表取締役

ナビゲーター：

近藤 武夫 東京大学 先端科学技術研究センター 社会包摂システム分野 教授

ファシリテーター：

紫牟田 伸子 編集家／プロジェクトエディター／デザインプロデューサー

<はじめに>

紫牟田：本日はご来場ありがとうございます。

まず初めに、このソーシャルファームワークショップについて簡単に説明いたします。この授業は昨年度から実施しておりまして、NPO 法人シブヤ大学と東京都のコラボレーション授業になります。ご参加いただいた方の中にはソーシャルファームという言葉を知っている方も知らない方もいらっしゃると思いますので簡単に申し上げますと、ソーシャルファームというのは障害や病気、引きこもりなどさまざまな理由から働くことに困難を抱えている方を他の従業員と一緒に雇用して、経営してらっしゃる社会的企業のことをと言います。

昨年度はソーシャルファームの成り立ちや海外の事例、東京都のソーシャルファームに認証された企業で働く方と経営者の方の話を聞いてまいりました。今年度はまた別の角度からソーシャルファームという考え方を学んでまいります。第1回は「世界のソーシャルファーム、日本のソーシャルファーム」をテーマに JICA の松本勝男さんから働く形・雇う形のさまざまなあり方についてうかがいました。第2回は「さまざまなソーシャルファーム」というお題で、株式会社ローランズ代表の福寿満希さんと、ディースタンダード株式会社の小関智宏さんに来ていただき、ソーシャルファームとしての経営や課題などをお話いただきました。そして、11 月に

開催した第3回では、「働く人の目線から見たソーシャルファーム」ということで、拓実建設で働く社員の方おふたりに来ていただき、従業員目線でのお話をいただきました。そして、本日4回目は、拓実建設の柿島社長と受刑者向けの求人誌『Chance!! (チャンス)』を発行している株式会社ヒューマンコメディ代表取締役の三宅さんにお越しいたいただき、雇う側と支援する側からの視点でのお話をうかがいます。どうぞよろしくお願いいたします。

全体進行は私（紫牟田）が担当いたします。ナビゲーターは東京大学の近藤先生です。先生、一言お願いいたします。

近藤：よろしくお願いいたします。前回から続けてきてくださった方も結構多いんじゃないかなと思うんですけど、このシブヤ大学では、実際にソーシャルファームで働いておられる方と経営しておられる方の両方のお話をご本人たちからしっかりお話を聞けるというあまりない機会になっていると思いますので、今日もまたそういうお話をうかがえるということで、私自身すごく楽しみにしてまいりました。よろしくお願いいたします。

紫牟田：よろしくお願いいたします。会場の方にちょっと聞いてみましょうか。前回も来たという方はどれくらいいらっしゃいますか。（挙手）半分くらいいらっしゃいますね。ありがとうございます。

それでは、まず今回ご登壇いただくおふたりを紹介させていただきたいと思います。

まず柿島さんは、関東一円の現場で内装の土木工事をメインとした事業を展開している株式会社拓実建設の代表取締役をされていらっしゃいます。拓実建設さんは、出所者の方が自立したり社会復帰できるように雇用する「協力雇用主」*であり、2023年には東京都のソーシャルファームに認証されました。よろしくお願いいたします。

* 協力雇用主 https://www.moj.go.jp/hogo1/soumu/hogo02_00030.html

柿島：よろしくお願いいたします。

紫牟田：そして、三宅さんは、みなさんも受付で受け取られたと思いますが、受刑者専用の求人誌『チャンス』を創刊されている株式会社ヒューマン・コメディの代表取締役でいらっしゃいます。拓実建設さんとは『チャンス』を創刊した当初からの付き合いだそうです。よろしくお願いいたします。

三宅：よろしくお願いいたします。

紫牟田： それでは改めまして、今回は「雇う人と支える人の目線から見たソーシャルファームのリアル」ということで、前半はおふたりにそれぞれの取り組みをお話いただく時間にしたいと思います。まずは柿島さんお願いできますか。

＜登壇者トーク＞

柿島：当社が、受刑者を対象とした就労支援フェスタの際に見せている資料に基づいて説明していきます。

在所中に本人たちにも説明している言葉なんですが、当社としては人と人の縁を大切にしています。実際、在所中に当社に『チャンス』を見て応募とか手紙が来るんですけども、その縁を大切にしているということと、もう1つメッセージがありまして、刑務所に入ると、普通に一般企業に就職するというのはなかなか難しいと思うんですが、当社を踏み台にさせていただいて、つまり1回うちで働くことによって履歴書を書ければ、という思いも込めています。実際、そうなった人間もいます。例えば、公務員だったり、大手企業のサラリーマンだったりとかです。

続いて当社の企業情報について、勤務地だとか給与は最初1万2000円からですよとか資料に書いてあります。いま従業員は約70名おりまして、うち4割が出所者・出院者になります。

採用活動に関しては、『チャンス』の創刊から掲載させていただいていて、去年から日本財団の「職親プロジェクト」というのもありまして、それも三宅さんのご紹介で加入しましたし、いろいろな刑務所に面会に行ったり就労フェスタに行ったりと、全国を回っています。

日本には刑務所は57あります。拘置支所とか女子刑務所、少年院を入れると100何ヶ所あるんですけども、いままでに行った刑務所の数が66ヶ所になりまして、今年（2024年）1月から11月までで38ヶ所回っています。北は北海道から南は沖縄まで。週1回、1泊2日で必ずどこかしらに行ってます。多い時は2回行っていますね。まだ行けてないところは、応募が来ないところですよ。応募が来ないと面会にいけないので。

福利厚生は、個室の寮完備で、部屋代は一日2,000円を給与から引かせてもらっています。それから社会保険。あと、現場で必要な資格の取得も全額負担しています。

就労支援で何をやっているかというところ、出所・出院のお迎えに行きます。あと、スマホの貸与。やっぱり出所者なので、だいたいは契約できないない。ですから、カケ放題・パケ放題プランのスマホを渡しています。あと住民票の移動ですね。大体の人は刑務所に入る前の住所だったり刑務所に住民票があったりしてしまっていて、住民票の移し方がわからない人が多いんです。免許証の更新も同行します。給料は最初の約2～3週間は日払い。やっぱり3～4年ぐらいの短期の刑務所だと作業報奨金がそんなにないので、その分日払いにして、その後、週払いか月払いを選べるようにしています。

就労後の定着支援として、豪華おせちがあります。この前もある刑務所に行って本人たちに話をしたんですけど、アワビが乗っているおせちの写真を見せたら、みんな笑ってましたね。「そんなの出るんだ」って。でもね、おせちって結構大事なんですよ。たいがいみんな、食べたことがないんですよ。そういう習慣がない。だから、おせちは、僕も1年間お疲れ様でしたという意味で、31日の朝に頼んでいたところに取りに行っていて、ひとりずつ配っています。あと、制服の支給ですね。

忘年会もやります。（写真を見せながら）これは全員じゃなくて、3分の2ぐらいの人数なん

ですが、Paix2(ペペ)というアイドルデュオに来てもらったんです。当日は、残念ながらひとり
がインフルエンザで来れなかったんですけどね。

刑務所にいた本人たちからするとスーパーアイドルより有名ですよ。私もこのふたりに感動
したんですけど、無料で全国の刑務所を自腹で回っているんです。もう何周目かだと思いますね。

三宅：そうですね。20 年で 500 回以上ですね。

紫牟田：そのアイドルが拓実建設に来てくれた。

柿島：ええ。お願いして。めちゃめちゃ盛り上がりましたね。やっぱり短期の刑務所だとタイミ
ングがあって見られるか見られないかだけど、長期だと 2 回くらい見ましたとかね。

で、当社の応募状況と定着率なんですけど、2019 年から採用しているんですけども、いまま
でおおよそ 400 名ぐらい応募がありました。毎年、採用した人の半分は残ります。去年の数字で
29 名の出所者が在籍して、そのうち 10 名が 1 年以上、3 年以上続いている人も 6 名おります。

ご説明した「職親プロジェクト」で、刑務所の刑務官に配られる冊子に社員が出ていて、彼は
まだ 32 なんですけど、10 年ぐらい少年院・刑務所を出たり入ったりして、ちょうど昨日、彼にま
た『チャンス』の表紙の取材をしていただきました。彼は福島刑務所だったんです。全部窃盗な
んですけども 5 回か 6 回ぐらい行ってるんですね。私も「どうしようかな、採用するの」ってち
ょっと悩んでたんですけど、彼が刑務所の面接で絶対やらないんだ、ということを……まあ、どこ
も行くあてがなかったんで、彼はもう 1 年は続いていますね。で、彼本人も言っていたんですけど、今
まで半年以上仕事が続いたことない、と。シャバに 1 年いるのも珍しいって言ってましたからね。

三宅：珍しいというか、初めてだと。

柿島：これからの弊社としては、当社にいる間に再犯はないでしょうから、1 件でも再犯がなく
なればということで、ソーシャルファームにも認証されて出所者に寄り添って行こうと思っ
ています。

それで、『チャンス』の最新号、後で皆さん見てみていただきたいんですが、会社紹介の次の
見開きに「拓実通信」というページがありまして、連載しているんですけども、皆さん今回初
めて見た方だとちょっとびっくりすると思うんですが、ある出所者の様子を 1 年間連載してい
て、企画としては、「彼は『チャンス』の表紙飾れるか」っていうのをやっていたんですよ。で、
ちょうど 1 年経って、見事に逮捕されました。そういうオチがある。

近藤・紫牟田：えっ！

三宅：ここ、笑うところです（笑）。

紫牟田：うわあ、惜しかったですね。もうちょっとだったのに。

柿島：そうなんです。彼は同僚のものを盗んだ。で、何でやっちゃったかというと、遊ぶ金が欲しくて。給料もちゃんともらってたんですよ。そういう問題もある。でも、初めてなんです。在職中に仲間のを盗んだ人間っていうのは今までいなかったんです。これ出ちゃって、この刊ももちろん刑務所に全部行き渡ってるんですが、各刑務所でざわついてます。

近藤：みんなやっぱり応援してたんですか。

柿島：やっぱり「やり直せるな」「目標だな」という人間も結構いて……。で、これが出たら、やっぱ手紙来て。「残念です」とか……。

三宅：彼は何か障害がありましたか？

柿島：ないんですよ。発達障害でもなんでもなかった。ただ遊びたかった。

紫牟田：やっぱり子ども時代とかは割と辛い思いをしていたという境遇の人たちが多いんですか。

柿島：少年院のほうは、例えば育児放棄だったり家庭の環境も要因は多いんですが、ただ、受刑者の場合だと、突発的な犯罪もありますし一概に言えませんね。私もうちの従業員にいる、施設育ちの失敗していない人に「施設で育ったから、ちょっと失敗したのかな」と言ったことがあるんですが、その人は「それは違います。施設で育った子でもやらない子はやらないです」と。そうですね。

紫牟田：どこに落とし穴があるかわからない。家庭に帰するわけでも、育ち方に帰するものするというものでもない。

柿島：少年院の子はやっぱりそういう問題は多いんです。だから、少年院で踏み止まってくれるかどうかですね。それで反省して。少年院だけだったらまだ前科にもならないので、そこで保護観察で20歳になるまで立ち直れば、そこからはやっぱり再犯は少ないと思うので……。

紫牟田：柿島さんが出所者・出院者を雇用しようと思われたのはいつぐらいのことだったんですか。

柿島：創業して間もなくですね。「協力雇用主」という制度は知っていて、やろうかな、どうしようかな、でもどこに登録すればいいかもわからなくて。登録するのも結構ハードル高いんです。ハローワークに求人を掲載したりとか、結構やるのがめんどくさいんですよ。ハローワークと法務省の保護局に連絡して登録して。そんな折にたまたま、Yahoo News で『チャンス』の三宅さんの記事を読んだんです。

三宅：そう。創刊する前にプレスリリースを出したんですよ。それを見ていただいて、ご連絡いただいたんですよ。

柿島：そうです。刑務所に求人誌ってあるんだろうか。国は認めるんだろうか、と思って次の日にすぐ連絡して「お会いできませんか？」と。その後、『チャンス』から応募が徐々に増えて。いまはもう『チャンス』からだけです。

紫牟田：刑務所にいる方が就職しようという時の情報は『チャンス』しかないんですか？

三宅：いえ、そんなことはないんです。刑務所の中の就労支援制度というのがあって、ハローワークの求人票で、ハローワークの駐在員が「こんなのありますよ」ってマッチングするんだけど、求人票って見てもよくわかんないんですよ。条件とか給料とかはわかるけど、どんな会社かわからない。そこで、『チャンス』とかの求人誌を使って、本人が「ここが良さそうだな」と選べるようにしているんです。

柿島：『チャンス』に掲載させていただいて、もちろん最初はそんなに応募もなく、最初は『チャンス』の知名度も刑務所の中ではそんなになかったの。応募の手紙が来たらすぐ面会しに行っていました。そこから2、3年経ってから徐々に徐々に……。

三宅：そうですね。創刊号は応募ゼロ。2号目くらいからちょっとずつ、っていう。

紫牟田：三宅さんはどうして『チャンス』を創刊しようと思われたんですか？

三宅：成り行きだったんですけど、2014年に、ボランティア先の奄美大島の自立援助ホームで出会った17歳の女の子と仲良くなって、その彼女が少年院に送致されて、その子の身元引き受けをすることになったんですね。そこからのご縁で、「何ができるかな」という風に思って、それで、2015年にこの会社をつくったんです。なんか、彼女とか彼女と同じような境遇の人たちの人生の背中を押せたらなって思って。で、最初は、そういう非行歴とか犯罪歴のある方専用の人材紹介事業、有料職業紹介としてスタートしたんです。でも、それをやってた1年半で面接できたのって20人くらいで、そのうち採用内定したのが5人。1年半で、ですよ。そしてそ

の5人も次々と会社に来なくなったり、「飛ぶ」って業界用語で言うんですけど、行方不明になったり、トラブルを起こしたり、再犯したり……全然職業紹介として機能しなかったんですね。これはまずい、と。おまけに職業紹介だと、こちらが「この人は真面目に頑張りますよ」とかお墨付きをつけて紹介するんだけど、うまくいかないと「どうしてくれるんだ」というクレームになるわけですよ、会社から。それで謝り倒すのも疲れ果てて、身が持たないな、と。何か他の方法にしないかって思っていたところ、あるきっかけがあって、「求人誌つくっちゃえばいいんだ」と思いついたんです。刑務所の中はネットや電話とか普通はできない紙社会なので、求人誌をつくって配ってしまおう！と。ゲリラ配布しようというくらいの勢いで。それで、2018年3月に創刊したんです。企業から掲載料をいただいて掲載するんです。

紫牟田：最初は何社くらいを掲載したんですか。

三宅：13社ですね。最新号は34社です。だいたい毎号30数社ですね。

紫牟田：『チャンス』を見ていてびっくりしたんですが、ほとんどルビが振ってあるんですね。

三宅：はい。小学校も満足に出てないという人も少なからずいて、漢字が苦手という人は結構多いんですよ。刑務所や少年院の中の資料も全部、本人たちが見る資料は全部ルビが振ってあるんです。編集スタッフがヒーヒー言いながらルビに間違いがないかを確認しています（笑）

紫牟田：他にこの冊子で工夫していることはありますか。

三宅：先ほどもお伝えしたように、ハローワークの求人票だと、条件はわかってもどういう会社かがわからない。彼らがいちばん気になるところって、お給料はもちろんそうなんですけど、ここに自分の居場所があるかどうかということだと思うんですね。なので、その会社の空気感みたいなものを伝えたくて、写真とか社長のメッセージとかを使って、求人誌というよりは会社紹介に近いかなと思います。

近藤：すごく共感しながらお話を聞いていました。僕は今までこそ障害のことをやってるんですけど、いまから30年ぐらい前に、当時“教護院”と言っていた児童自立支援施設で夜に勉強を教えていたんです。

障害の世界に来たのは、教護院では字が読めない子や、漢字や算数が苦手な子たちが結構多くて、勉強が向いていない子がいるんだなと思ってたんですけど、海外の本を読んでたら“学習障害”というのがあると。当時は知られてなかったんで、それで僕は障害の世界に行ったんです。字が読めないんだったら録音したものを聞けばいいじゃないか、みたいな感じで。いまはそういう子たちが学べるようにサポートをしてるんです。

あと、僕はいま全国のいろいろなところで「超短時間雇用」にも取り組んでいます。病気や障害があっても短い時間から働けるという仕組みをつくってやってるのですが、ハローワークに載っている求人って、“清掃”とか“事務補助”とか書いてあるんですけど、何をやるかさっぱりわからないんですよね。なので僕らは、「内視鏡の清掃で時給いくら」と社長が出てきて、“こういう風にやってます”と情報を出しているんです。だから、三宅さんのお話にすごく通じるなと思いました。

再犯というか、どうしてもそういう“罣”みたいなのがありますが、でも本人のせいなのか？むしろ社会の側にそっちに行かざるを得ないようなものがあるのか？

僕は前回、内山さんと宮下さんのお話を聞いてとても感動したんですけど、ふたりとも、拓実建設の条件がすごく良かったというのはあったし、その条件がわかりやすく『チャンス』に載っていたから、もうここしかないと思って応募したんだって言っていましたが、いくつもいい点があるんだって言うていたんですよね。ふたりとも共通して、スマホが決め手だったって言うてましたよね。「スマホを貸すと言うてくれるところはない」とか「迎えに来てくれるところもない」とか、「しょっちゅう会いに来てくれたり、手紙のやり取りしてくれるところもない」。家族とも縁を切られているから、入社した時の迎えにも来てくれるって本当に安心だったとか、いろんなことを教えてくれて。本当すごいなと思ったんですよね。僕は学習というか、教育の方に行っちゃいましたが、あ、こういう道もあったんだなと思って。

僕の周りには割とやんちゃな子たちが多かったので、なんでその支援がないのかなと思っていて、私はいま障害のほうから続けているんですけど。柿島さんに聞きたいのが、どうして起業の段階から協力雇用主に関心があったんだろうということです。

柿島：単純に採用活動の一環で、たまたま刑務所・少年院の子を採用することになっただけなんです。でも、私も最初採用し始めた頃、1回三宅さんに電話したことがあるんですよね。大体年に1、2回あるんですけど、立て続けにいろんな刑務所に行かなきゃいけなくて、往復で車で行くんで2,000kmとか3,000km走るんですよね、1週間で。「なんでこんなことやってんだろう」って三宅さんに言ったことあるんですよね。うちのスタッフにも言われたんですが、「社長、もう麻痺してるんですよ。罪名とか聞いても、もう麻痺してる」って。だから例えば、性犯の人は真面目だよなって僕は思うんですよ。働きを見てるし、国の観察所の人も「痴漢や下着泥棒は病気だから再犯するんですけど、性犯はそんなに再犯はないんですよ」と。

経営上から言えば、“雇ってあげてんだ”という考えではなく、最初から、“この人なら何ができそう、現場経験なくてもここの現場につければなんかいけそうだな”という戦力として計算すれば自ずとうまく噛み合う。あと win-win の関係なんですよ。これも本人たちに言っているんですけど、もちろんオーナーだから給料は俺のほうを取り分が多い。でも頑張ればもちろん昇給もするし、本人がやる気になれば、また仕事は元請さんから指名でもらえるし、本人も会社も win-win かなと。そうしたら、定着率もアップしていけるかな、と。

近藤：そこをすごく聞きたいんですよ。僕は超短時間雇用を全国でやっていて、中間支援して繋いでマッチングしてくれるセンターをいろいろなところにつくっているんですけど、そういうところの仲間たちには、絶対に「障害者を雇ってほしいと“お願いするな”」って言ってるんですよ。そんなことは止めてくれ、と。

では、どうするかと言うと、まず最初にその職場に出かけて行って、その職場の人と一緒に困り事を考えるんです。何に困ってるかを一緒に考えて、「これで困ってるけど誰かが来てくれたらとても助かるよな」というのを先に決めるんです。先ほど言った内視鏡の洗浄とかを決めて、で、それができる人に来てもらうっていう考えなんです。病気や障害があっても、それができるのであればその人は職場を助けてくれる人になります。労使に上下を作るのではなくて、お互いに win-win の関係となるようにしたい、という考えがあります。

前回のお話も今のお話もそうなんですけど、前回、宮下さんが社長の人柄が素晴らしいと言っていて、その理由は「とても対等な関係で話してくれるんだ」と言ってたんですよ。それで、今の柿島さんのお話も「俺とお前は win-win なんだ、対等なんだ」ということで話してくれてると思うんですよ。それが大事だと思うけどそうならない。というか、そうなりづらい職場って結構あるじゃないですか。なぜ柿島さんはその考えにいきなり行ったのでしょうか。なにかあるんですか。

柿島：まず最初の頃に、刑務所の見学みたいのがあるんですよ。いろんな協力雇用主の社長さんと一緒に、刑務所の人が案内してくれて、「質問とか要望ありますか？」みたいに刑務所の人にも気を遣うわけなんです。そこで他の企業の社長が「出所者は続かない」とか、「長続きしないのは教育が足りないんじゃないか」とか、「資格をもっと取らせろ」とか、そういう要望を言っていたんですよ。まあ、言い方は悪いですけどその時に思ったのは、「こいつ、頭おかしいかな」と。だって刑務所は、常識は通用しない、法律を守らない人間がいるところでしょう。それを分かりきった上で雇っているのに、刑務官だってボランティアじゃねえんだよ、と思うよね。あくまでもその罪を犯した人に対して、刑務所にいる間ルールを守るようにしているわけなんだから、刑務所にその要望を言ったってしょうがない。そこから、他の協力雇用主はどうしているのかとか、結構周りを見るようになったんですね。こういう人らと一緒に動いてもしようがないなと思って、自分で自分の考えていることをやっていけばいいのかな、と。これは不思議なもので、土方の世界というのは、お金をくれる人間には歯向かわないんですよ。喧嘩はしますが、刺されるとかそういう心配はしてないです。現場に出ている人間ってやっぱり本音で話をするので、そこは裏表がないからこそ、win-win——こっちも思ってること言ってあげれば win-win になれるかなというやり方ですね。

近藤：昨年度、ディースタANDARD社さんが来てくださったんですが、その時にすごく象徴的だったのは、ディースタさんは NPO 法人育て上げネットの人たちといろいろ話をする中で自分たちも一緒に育っていった、みたいなことをおっしゃっていたんです。

今回のお話では、例えば、居場所がそこにあるかどうかが伝わるのが大事で、そこにいる人たちのあり方とかを考えながら話すわけじゃないですか。

でも、三宅さん自身は、実際には有料職業紹介をやり始めたら、全然決まんないわ、飛ぶわ、再犯するわで。でも、そこを超えた先に行けるっていうのはあったんだと思ったんですよね。やり続けようという原動力みたいなものは三宅さんの中にあったのですか？

三宅：あまりないんですけど。

近藤：それは、なんかうまくいったな、みたいな感じだったんですか？最初の頃は掲載企業が少なかったと思うんですけど、それでもとにかくやり続けてきた、みたいな感じなんですか？

三宅：1つには、後に養女にしたその女の子、この会社のきっかけになった女の子の誕生日に会社を登記したんですよね。彼女は誕生日が嫌いだと言っていて、親から死ねとかひどいことをいっぱい言われてきているから。だから毎年自分の会社の記念日に彼女のお誕生日を祝い続けたって思ったし、私が死んだ後もこの会社が残っていたら、なんか応援してくれる存在があるって思えるかなっていうのはあります。でも、それだけではないよなと思っていて……。最近そういうことかと思ったのは、私は私で発達障害があるし、学校でも会社でも、自分の居場所をずっと探してきて、この『チャンス』をつくっているヒューマン・コメディを自分の居場所として見つけたんだなと。その辺ですね。その人のためにとか再犯防止とかは、結果そうなればいいなとは思いますが、大義名分とか全然ないんです。

近藤：それを話してくださったのはすごく嬉しいです。“ルサンチマン”という言葉があって、自分自身がやりきれなかった思いをたくさんしてきていて、それを晴らしてるというか。それって大事ですよね。

三宅：そうですね。

近藤：受刑者向け求人誌をやっているところは他にもあるんですか？

三宅：いまはもう何社もあって、中にはもう丸バクリもあります（笑）。

近藤：まあ、真似されるっていいことですからね。広がっていくから。

三宅：老舗が素晴らしいから、真似するんですよね（笑）。やっぱり選択肢が増えるのは、ものすごくいいことだと思いますね。

近藤：本当にそうだと思います。前回登壇したふたりも、『チャンス』と拓実建設さんの求人内容が一番わかりやすいと言っていました。それはやはりおふたりのパートナーシップというか、そういうお仕事だったんだと僕はすごく思いましたね。

紫牟田：柿島さんは、拓実建設で働く社員さんが『『チャンス』見てないね、懐かしいね』と言った時にすごく嬉しかったとおっしゃっていましたよね。

柿島：そうですね。じーんと来ましたね。『チャンス』を見ないということは、もう刑務所の中にいないし、再犯をしようという気はないという現れですから。『チャンス』に縁がないのが1番ですね、出所者たちにとっては。

<質疑応答>

紫牟田：それでは、そろそろ会場からのご質問をいただきましょうか。

質問者 A：今日は貴重なお話ありがとうございました。社長の言葉の中で刺さったのは、従業員の方と対等な関係で接しているということでした。ただ、なんて言うんでしょうか、普通に生活していても人との関係を築く上で、相手に期待してしまうと裏切られる瞬間というのがあるのかなと思っています。多分、拓実建設で仕事をしてる中でもそういう瞬間があるのではないのでしょうか。それでもいまの事業を続けているということだと思うんですけど、あきらめの気持ちがあるのか、一定の割合で裏切る人がいるとか、どのように感情の整理をされてるのか、教えていただきたいです。

柿島：それ結構聞かれるんですよ。まず“やってあげてる”という気持ちがあると、やっぱり裏切られたとか思っちゃうんですよね。“これだけやってるのに”と。

でも私は全く思わないです。自分の仕事の一環ということもあるし、自分で実際に刑務所で何回も会っている人間なので、ダメだったらもう誰にも文句が言えないのではないかな。もちろん、いろんなトラブルもあります。「今回のトラブルはこんなパターンで来たな」とか「こんなこと言ってくるんだ」とか。それらに対応するだけです。それと会社を守るため。あとはもういちいち気にしてらんないんですよね。

1日平均で2〜3通、多い時は十何通の手紙が来るのですが、みんなすごい熱い思いで書いてくるんですよ。ただ出所すると「なんだ、お前」「バカじゃないか」みたいな（笑）。まあ、もちろん許すんですけど、そこはもう考えないようにしてます。“やってあげてる”とかではなく、もう自分の仕事の一環ですね。

質問者 B：貴重なお話をありがとうございました。おふたりの原動力というか、根っこの想いを

聞きたいなと思っています。

三宅さんに対しては、どうしてそんなに奄美大島の女の子にぐっと心惹かれたというか、思いを寄せてらっしゃるのが気になります。

柿島社長は、協力雇用主の制度を知っていたということですが、なぜそれを知っていたのでしょうか。知った上でも詳しく調べる人と調べない人が分かれると思っていますので、そこをぐっと入り込んでいくのはどうしてなのかを、教えていただける範囲でお聞かせいただけたら嬉しいです。

三宅：一言で言えば、縁があったってということだと思うんです。でも、そもそも少年院から彼女が手紙をくれた時に、なぜ私が彼女ともっと深く関わりたいと思ったのかというと、彼女は両親が健在なんですよ。でも母親から育児放棄されて、父親がその後引き取ったけど父親も出て行って、父親の再婚相手が虐待するようになって、それで児童養護施設とか里親とかを彼女は転々とするんです。彼女が最後にいた奄美大島の施設は、とても素敵な施設だったんですよ。「奄美青年支援センター ゆずり葉の郷」という、保護司の三浦一広さんがやってらっしゃる施設で、私もあそこにずっと住みたいくらいなんですけど、彼女にとってみたら、悪いことばかりしてた施設に戻るしか選択肢がないんですよ。私は人生で選択肢ってすごく大事だと思うんです。選択肢がないと、人は“やらない・できない”の言い訳にしようと思うんです。

そこで夫にこの子の身元引受人として名乗りあげたいと言ったら、いいんじゃないかって言ってくれたんですけど、でも縁もゆかりもない人間、あと雇用主でもない人間が、少年院の少女の身元引受人になるのは無理ということを知ったんです。犯罪防止の側面からだと思うんですけど。それで「話が進まない」と夫に言ったら、「じゃあ養子縁組すればいいんじゃない？」と言ってくれた。それは、私も目論みではいたけど、まだ夫と彼女は会ったこともないから、出てきてから追々に……と思っていたらそう言ってくれたから、養子縁組しない？と彼女に手紙を書いたら「そうしたい」ということで。なんて言うんですかね、関わりたい・関わるって決めて、関わっていったの成り行きなんですよ。当然、縁があったと思うんだけど、そんな感じです。

柿島：協力雇用主のことは、前職も建設業だったので以前から知ってました。登録しようと思ったのは、創業当初、社員が5人しかいなかったんで、自分の営業力があれば、人が増えれば仕事も増えるとわかっていたので登録しました。会社を大きくしたいというのが原動力でした。

質問者 C：大変貴重なお話ありがとうございます。おふたりの話を聞いてると、おふたりとも社会的正義とかそういう話ではなくて、一生懸命やっていたらこういうところに立っているんです、というような感じで、すごくそれが印象深かったです。いろんな出会いがおふたりをいまこの場所につれていきっているのかなと思った時に、おふたりを助けてくれた存在がなにかあったのでしょうか。それこそ柿島さんにとっては多分三宅さんも助けてくれた存在のひとりだと思います。

うんですけど。

柿島：三宅さんが最初に面会に連れてってくれたんですよ。東京拘置所に。面会のやり方ってこうなんだっていうのを。それ以外助けてくれた？……ないですね。（一同笑）。でも最初の頃って、どこの刑務所に行ってもすんなり面会できないし、就労面接の申し込みも向こうから来るんですが、結構よそよそしいんです。今はもう三宅さんも僕も全国で有名で（一同笑）、特に三宅さんはどこへ行っても刑務官とちょっと一杯飲む（笑）くらい認知されるようになってきたので、それがまた助けに。多分、僕も三宅さんのおかげで、他の刑務所の刑務官と一杯飲む場所ができたぐらいです（笑）。以上ですね。

三宅：別に飲んでばかりいるわけではないんですけど（笑）。創刊からずっと出してくださっているのは柿島社長の会社だけなので。それにもうぶっちぎりで応募者数と採用数があるので、それが当社の実績にもなっています。それで、実績を出したら法務省も少年刑務所からも認められてきたというか、信用されてきて、本当にいろんな方が支援とか応援をしてくださるようになって……。本当に一人でできたことは何もなくて、こんなことやりたい、やりますって言ったら、みんなが応援してくださって助けてくださったっていう感じです。

質問者 D：貴重なお話をありがとうございました。私からは2つあります。

1つは受刑者の方が働き続けるとか、あとは社長からは再犯が減るっていうような目指してる姿に対して、社会の何が本当にネックになってるのかなということです。うまくいくこともあれば、うまくいかないこともあるんですけど、社会としては何が1番ネックだと思っていられるか？

もう1つは、ずっと取り組まれているおふたりだからこそ聞いてみたいんですけども、どんな未来になっていくといいと思われているのかなということに興味を持ちました。私は全然知識がないので、今日はわからないなりに聞いてたんですけども、例えば『チャンス』に掲載している企業さん——私も前職は建設業におりましたので、建設の現場って結構大変なのは本当に体感としてあるんですけども、掲載企業さんが建設ばかりしかないなと思ったんですね。なのでもっといろんな業種がないのかなと。偏見とかもやっぱりあるような気がして、そういう社会側の問題がやっぱりあるなと思うんですけども、将来どうなってほしいのかという2つのことをおふたりにお聞きできればと思います。

柿島：はい。まず、社会のネックというのはやっぱりインターネット、SNSになってから、目に見えない誹謗中傷ですかね。「面と向かって言えよ」って思うんですけどね。でもそういう人に限って言わない。あとはやっぱり、1回失敗した人に対して許せなくなっている社会はあると思います。例えば自分なんかは10代のうちに先輩が少年院に入ったとか、僕はたまたま入ってないんですが、そういうのが普通にあったと思うんです。いまはやっぱりそれを許さない風潮が本

当になんか歪だと思ふ感覚があります。

それともう1つ。これはあくまでも僕個人の意見ですけど、いま国が技能実習生制度をやっているんですけども、それと出所者の採用は一緒なのかなと。言っちゃ悪いんですけど、要は、結構な会社がそういう人たちを安い給料で働かせている。貧困ビジネスじゃないんですが、そういった企業さんも多いのかなと。出所者だからとか実習生だからとか、あいつらそういうのしかできないとか、そういう風潮が多いのかなと。だから採用側の意識を変えてあげないと、なかなか未来というのはどうなるか……。実際、刑務所も来年から、禁固刑と言っているのが拘禁刑になるでしたっけね。刑務所の中では、番号で呼ぶのをやめて“さん”付けにしようとか、集団行進をなくしたりとか……。それを本人たちに聞くと「そんなの馬鹿げてる」と。人権に配慮するのは当然必要なのでしょうけど、やっぱり悪いことをやって刑務所に入ってるわけですから。被害者も絶対にいるわけなんで、そんな人間に選択肢を与えたらダメだと思ってるんですよね。本人たちもそう言っている。かといって国で決まってることなので、それがまた何年間かしたら、受刑者に当たり前になって、就労意欲が果たして出てくるのかなっていう心配はしています。

将来については、『チャンス』の応募は増えるのかな？減るのかな？自分に置き換えた将来というと、そういうことです。数字があるんですが、受刑者一人にかかる年間の国の予算は500万なんですよ。だから犯罪を犯した1人500万を税金で消費しているんですよね。それで、働かなくてもいい、工場に出なくていい——国は何を目指してるんですかね（苦笑）。僕が言えるネックと未来。未来はちょっとまだ見えないかな。

三宅：いまの柿島さんの話にも通じると思うんですけど、いま社会で一番足りないものは想像力だと思うんですね。自分がこの人と同じ環境に生まれ育っていたらどうだったとか、何かしらの理由とか背景があるのだから、それを想像してみる。あるいは、自分がある日事故とか天災とかで働けなくなって家賃が払えなくなったらどうだろうとか。今日も理事のひとりから電話があって、自分の息子がものすごいパワハラにあって、それでなんか怒鳴り込みに行っちゃったんだとか。なんでそんな不利になるようなことするのと言ったんですけど、その自分の大切な人が何かされて、何もしないでいられるかっていうと、もう私も自信はないんですよね。

“想像してみる”っていうことが大事だと思うんですけど、でもなかなか自分に起こっていないことを人は想像しづらいとは思っています。そうした時に感謝できてるかなと。自分がいま犯罪をせずに生活できていることは、自分ひとりの力で成し得たことだろうか。生まれ落ちたスタート地点が圧倒的に違う人たちっていうのはいっぱいいて、そうであっても犯罪しない人もいます。それは本当にそうなんですけど、そうじゃない、いまの自分の生活に感謝。この社会全体で、あまりそういう見方をしないのかもしれないと思いますね。

柿島さんは、“自分はたまたま少年院に入っていない”とおっしゃってますけど、私も非行歴があって、でもたまたま私は恵まれていたから行かないで済んだ。だから、いまこうやられてるんですけど、そう感謝してみる。あとは、人に強く当たるのって、自分が自分に許可を出してないことがたくさんあるからなんじゃないかなって思っただけ。「自分がこんなに一生懸命やってんの

に、お前何やってんだよ」って、多分人はそうなると思うから、自分を大切にしているのかとか、自分の一番身近な人を大切にできているのかとか。

なんかそういうところから始めるだけで、社会って結構変わるんじゃないかなって思っているんです。誰でもできることです。想像する、感謝する、自分を大切にする。私はそんなことが、単純だけど必要かなって思っています。

<参加者同士の意見交換>

紫牟田：ありがとうございました。それでは、これまでのお話でみなさんが考えたこと、感じたことをお隣の人たち 3〜4 人でグループになって意見交換していただけたらいいと思います。ので、これから 15 分ぐらいお時間を取りたいと思います。柿島さん、三宅さん、ありがとうございました。

(グループでの意見交換)

紫牟田：それでは、短い時間でしたが意見交換していただいたと思いますので、それぞれのグループから話し合ったことを発表していただけたらと思います。

グループ A：グループの中で話に出たのが、まず、“その人たちの意思を第一に”みたいなことをお話されていたと思うんです。そういう部分を大切にきて、他の方たちと繋がれるようになるんですけど、そういうのがあるからこそ、企業でも働けるような感じになっていくんじゃないかというような話が出たり。あとは、人助けをしたいと何か大きな理由ではなくて、出会いとかきっかけがあったからいまこうなってるんだ、というお話が新鮮だったという感想がありました。あと、居場所があることが大切なんだろうという話になって、自分を受け入れてくれたりする場所があって、安心感がある場所があれば、みんなが生きやすくなったり働きやすくなったりするんじゃないかなという意見もありました。あとは、3 年以上働いてる方が 6 名、1 年間働いている方が 10 名とかだったりしていたので、辞めた方たちはいまどうしてるんだろうっていう話も出ていました。

グループ B：今日は貴重なお話をありがとうございました。私たちが話したこととしては、1 つは、これまで自分たちが働いてきた会社、あるいは働いている会社と、お話を聞いてきたことと比べて、何が違うんだろう、何かが根本的に違うけど、何が違うんだろうっていうことです。やっぱり従業員、働く人を人として見ているかどうかがあるんですけど、根本的になぜそういうふうにできているのか、それはなんだろうねっていう話がありました。大きい会社になると仕組みが整うけれども、仕組みで全部がうまく回るわけでもないし、そこで働く人たちがみんなハッピーになるわけでもない。けれども、ソーシャルファームの話をいろいろと聞くと、すごく人に重点を置いていて、みんなが幸せになれる会社ができるんじゃないかってちょっと思えて

くる。その話と、あとは、想像力ということと言うと、失敗していないのに気づくっていうことはすごく難しい。それは犯罪という大きく構えたことではなくても、例えばちょっとお酒を飲んで記憶がなかったらこんなことしてたよって他の人から言われて、「あ、自分でもそういうことがある」っていう気づきがあることとか、あるいは、本当にこういう場でいろんな方のお話を聞いたりするっていうことの中で、やっぱり養えるような想像力みたいなものもあるんじゃないかっていうこと。そんな話をさせていただきました。有意義な時間でした。

グループ C: このグループでまず最初に話に上がったのが、「あなたのためにやってあげてるんです」じゃなくて、「いや、自分のためにやってるんです」というスタンスがすごくいいねということでした。自分のためにやっていて、その上で、win-win の関係を築くためにやっていることなんです、と言うほうが、相手も信頼できるだろうし。「あなたのためなんです」って言われると、なんかちょっと「本当かよ」みたいな感じになっちゃうけど、そこがちゃんと対等で、「いや、自分のためにやってるんだよ」っていう話が、すごく信頼できるし、納得いくという話がすごく出ました。その上で、企業としてはそういう話もありつつ、社会活動に目を向けた時には、一方で“お互い様の精神”で助け合うみたいなそういう活動もあったりして、そういう視点でのアプローチも、ものによっては有効なんじゃないかなという話がありました。あと、個人的な思いなんですけど、柿島社長がおっしゃってた技能実習生とかの話もちょっと上がったんですけど、なんかこう「やってあげてる」っていう構図が生み出す搾取みたいなものについては、そのあり方みたいなものを考える必要があるのかなっていうのを感じました。

グループ D: 本日はどうもありがとうございました。すごく有意義な時間というか、ためになるというか、すごい身につまされる話も聞くことができました。特に「やってあげてる」っていうところ。私は就労支援員をやっているんですけども、すごく自分の中で「やってあげてる」に対しての裏切りとか、特にここ最近すごく身につまされるところがあったので、個人的な話になっちゃったんですけど、ここは自分の中でもいろいろ考え直していく必要あるかなと思いました。

グループで話させてもらったのは、おふたりの想いとか、失敗に対して許されない社会に対して、いまの新人教育自体がそもそも失敗させないような教育になっていることとか、匿名で相手を平気で傷つけるとか、これに対しての想像力、相手がどう思うかとかを想像することの欠如があるのかなど。かつ、メディアなどでも、犯罪者という形になってしまった方の一面しか切り取られてないとか、その後の状況とか、やっぱり自分たちが知らないことが多かったということ。なので、ソーシャルフォームだけでそういうシステムがつくっていくのはやはり難しいと思うので、それ以外の場所でも、メディアとかも含めて、やはり自分の居場所をづくりのための何かの発信ができればいいのかなと思いました。あと、特に今日共通して思ったことは、おふたりがすごく社会のためになっているということにも関わらず、それを当たり前としてやっていること、そこをすごくいい意味で裏切られたという声も上がりました。

その中で、2つの疑問が出てきました。1つ目は、当たり前のことをやっていらっしゃるんで

すけど、冊子をつくるにはやはり印刷代とかいろいろお金かかると思うんです。全国の刑務所とかにも配布してると思うので、ビジネス的な面になるんですけど、利益が出ているのかということ、『チャンス』というタイトルをつけた理由、ヒューマン・コメディという会社名をつけた理由を、もしよろしければお聞かせいただけたらと思います。

三宅：まず1つ目です。掲載企業から掲載料を1ページにつき10万円いただいています。よく高いとか言われたりするんですけど、制作費で百何十万と送料で40万くらい。あと他にも人件費とかいろいろかかっているんですね。ただ最初から10万にしていたわけじゃなくて、最初は半分の5万だったのを、徐々に10万にしていきました。当初、赤字で出した号とかは何回もありますけど、でも会社として借金はしてないですし、まあ、経営決算で黒字になったことは1回もないんですけど、通帳にお金はあるから回ってはいますね。

2つ目のヒューマン・コメディという会社名。これはですね、私が15歳で高校退学になって母親を泣かせた夜に、すごく申し訳ないと思ったし自分も落ち込んだんですけど、その時、いつかこれを自分は絶対にネタにするって決めたんですよ。それで、そこから自己プロデュースしていまに至るんです。だからネタにするっていう……なんて言うんですかね、なんでもネタにするというのが自分の中にあるんです。やっぱりどんな悲劇も喜劇になるって思っているんですね。犯罪はネタにしちゃいけないし喜劇にならないけど、でも一生懸命出してから頑張ってる生きて、それで笑って死ねたら、それはネタだと思えるし、喜劇だなあと思うので、『チャンス』という雑誌のタイトル自体は、父からもらった私が一番好きな小説のタイトルがぴったりかなと思ってつけました。

グループE：今日はありがとうございました。2人だけしかいなかったんですけども、話したことは主に2点です。1点目は、こちらの方が昔、人材紹介の仕事をやってらして、その時に犯罪を犯したと思われる方が候補者だったんだそうです。で、その方を企業に紹介しようとしたら、ちょっと雇うのは難しいと言われたと。それをきっかけにこういったことに興味を持たれたらしいんですけども、やっぱり犯罪を犯したと思われる方がその後どうなったのか気になってらっしゃる。もしかしたら、居場所がなくて、就職できなくて、また再犯してるかもしれない。世の中の再犯率が高いということなので、その心配があると。だから、そういった時におふたりのような方、あるいは会社があれば、そういう犯罪を犯したと思われる方も、もしかしたら就職できる／できたかもしれないようなことを、今日お話を聞いて感じたとおっしゃっていました。

私は前回も参加させていただいたんですけども、拓実建設の従業員の方のお話を聞いて思ったのが、社長がなぜこういった、元受刑者と言われる方を積極的に採用してるのか、その原動力を知りたいなと思っていました。今日、近藤先生からもそういう質問をさせていただいたし、参加者の方からも何人かの方からも質問があって、おふたりとも別に原動力というのはないのかなとお話を聞いていて思いました。それは先ほども話に上がっていましたが、誰かのためにや

っているんじゃないくて、もう当たり前やってらっしゃる。縁があったからやっている。自分のためにやっている。Win-win だからやっている……そういうことなのかなってということで、何かこう、腑に落ちた感じがしています。

<おわりに>

紫牟田：みなさん、ありがとうございます。時間にもなってきましたので、そろそろ締めていきたいなと思います。今日はおふたりに来ていただいたんですが、もっともっとお話したいなと思う時間でした。すごく皆さんが、感じたようなことを共有できて、すごくよかったなと思っています。近藤先生からのまとめをいただけますか。

近藤：はい。今日はこちらの席じゃなくて、本当はみなさんと一緒に席で聞いていたかったなと思うんです。ずっと自分が気になっていたこと……いま障害というアプローチでやっているけれど、それもたまたま出会いがあって取り組んでいるんですけど、ずっと気になっていたことに直接関わっておられる方々のお話を聞けるということは、もう私にとっては本当に嬉しくて、最初から皆さんと一緒に気持ちでいたので、みなさんから上がってくるいろんなコメントは、僕からしてみると本当に共感できることばかりでした。本当に素晴らしい時間を過ごさせていたなと思って思います。

障害ではないところから取り組んでおられて、かつ、ご自身の実体験だったり、本当にシンプルなお自身の世の中の捉え方だったり、そういうところからやっておられるんだけど、私たちがいま研究の現場でもいろいろとやっているようなことを自然な言葉で語っておられるということすごく感じました。領域は違うように見えるかもしれないけれども、それは包摂するということか——居場所になるとか、歓迎するとか、そういうところは本当に共通しているんだなということを、心の深いところで感じられたような気がして、素晴らしかったなと思いました。ありがとうございます。

紫牟田：ありがとうございます。最後に、柿島さん、三宅さんからも一言いただけたらなと思うんですけども、いかがでしょうか。

柿島：今日は本当ありがとうございます。ただ、何喋っていいかわかんないですけど、受刑者、元受刑者っていうくくり、当社で NG としている罪名は薬物ぐらいで、来年から殺人も入ってきます。うちにいる一番刑の重い人は14年入ってたんですが、罪名が強盗、強盗致傷、強姦の3つがついたんですよね。皆さん多分、その3つがいっぺんに加算されるとすごい悪い奴っていうイメージあると思うんですよね。近寄り難い。でも、彼と一緒に飲みに行ったりもしますし、普通に冗談言ってるし、長洲剛が好きなのかな。で、昨日もなんか登り龍の絵を見せてくれて、「描いたんですよ」って言ってて、もちろんうまいんです。でも、彼が前に僕に言った言葉っていうのが「14年行ってるから、もう懲りてる。もう絶対戻りたくない」と。そういう人間も……。

なんて言うんですかね、うまく言えないんですが、一見して怖いとかとか、確かに被害者がいるので、僕も割り切れない気持ちはあるんですけども、でも一緒に飲んで、その笑顔……やっぱり本当にやり直せるんだと。自分自身でもう絶対再犯しない、というのは自分の意思でしかないんですが、そういうことだと思うんです。本当になんでやってんのかと言われると、そういう、一緒に飲んで冗談言って、それが1番自分にとっての幸せですし、本人にとってもそれが一番幸せなのかなと思うんですね、私は。以上です。

三宅：総括って苦手できないんですけど、ヒューマン・コメディの社名の由来を聞いてくださって、ちょっと思い出したことがあるんですよ。ある教育委員会主催の講演でお話しさせていただいた後に質問があって、「なんでそんなに笑顔が素敵なんですか」っていう、むちゃくちゃ答えづらい質問が来たんですよ（笑）。それで、無期懲役の方を内定した掲載企業の社長の話をしたんです。無期の方で採用になった方ってこれまで5人いて、2人は残念ながら死んじゃったんですけど、その2人の内のひとりを内定した社長が私に、内定した後で「ところで彼の罪状ってなんだったっけ？」っていうんです。なんだったかな、強盗殺人でしたかねえって言ったら、その人が「あははは」って笑ったんですよ。それで、「そんなこともあるよね」って言ったんですよ。「やってしまったことは仕方ないよね」と。いろんな思いがこもった笑いだったんですけど、笑うって、笑いとばすって、相手も認めたり、いったんここで許す、っていうことなんだろうなって思って、「だから笑うことを大事にしています」みたいな話をしたんですけど、その後、クレームになったんですよ。“強盗殺人を笑うって、非常に違和感を覚えました”みたいな。（一同笑）

まあでもそれはね、完全に私が悪いです。伝わらなかったのは伝え方が悪い。でも、私はその事業主さんのことはすごく好きだし、そういう方いっぱいいらっしゃるんですね。柿島さんもそうです。そういう方にいっぱい関わってほしいなって思うし、そんなことも人生あるかもねってみなさんが思ってくれたらいいなって思います。以上です。ありがとうございました。

紫牟田：本当にありがとうございました。

近藤：いや、もう素晴らしかったね、本当に。多分、今日来た皆さんも、いろんなことがね。心、それから過去の、ご自身のこととか、いろいろ思われているんじゃないかなと思いながら聞いてましたね。

紫牟田：そうですね。人間ってなんだろうって思いました。本当によかったです。

というわけで、これで今年度のソーシャルファームワークショップ、全4回の授業はこれで終わりになりました。本当にたくさんの学びがあって、3回目に来ていただいた拓実建設の従業員のおふたりにも本当に感謝です。そして、今日来ていただいた柿島さん、三宅さんにも本当に感謝です。そして、毎回来てくださったディースタANDARD社のおふたりにも、そして、何回も来

てくださってる方も、初めて来てくださった方も、本当に皆さんにも感謝してます。

本日の様子は、後日アーカイブとしてシブヤ大学のホームページ等に公開する予定ですので、ぜひ振り返りを兼ねてご覧いただきたいなと思います。また、皆さんの周りにソーシャルファームにちょっとでも興味のある方がいたら、アーカイブなどもシェアしていただけたら、すごく嬉しいです。それでは、ソーシャルファームワークショップを終了させていただきます。

柿島さん、三宅さん、近藤先生、そしてみなさん、どうもありがとうございました。

以上